すのである。

教科の指導に直接教科書を使用する場合は、選択され配布される教科書の内容や質によって、子どもたちの発達・認識を左右しかねないので、教科書の中身とそれを選択する人たちの能力と思想性が問われるのである。

同志会の系統性研究は、水泳の「ドル平に始まりドル平に尽きる」と言われるほど、指導の系統性の原点と中身が結実していると言える。多くの教材研究・系統性の確立にドル平のもつ有意性と普遍性は、今日でも各教材研究の原点として重要視されている。

ドル平は単なる水泳の指導法だけではなく、一人の子どもも取り残さないで発達・習熟を保障しようとする思想、対象者の理解・認知に基づく指導の方法や手順を内包しているので、ドル平のもつ意義を十分咀嚼し認識して欲しいと考える。

先日も元会員であったという人の水泳指導に関わる機会があったが、一面的な理解と指導のためにドル平泳法のもつ内容が正しく継承されず、形式的な展開となり、子どもたちが多大な苦痛と未習得者が残されていた。基礎泳法からの質的発展どころか、部分的な欠点を残すことになり、逆に技術的・質的発展を妨げるような現実に直面し愕然とした。しかし当人の努力によって、重要な指導ポイントの間違いとズレがあったことの理解によって、急速に指導内容と指導法の発展を見ることができたので、ホッと安心したのは未だ記憶に新しい。

もっとも普及し普遍化しているであろうと考えられるドル平でさえそうであるから、もっと多様で複雑な陸上運動や球技の理解や普及には、更なる研究と本質的理解が必要なのではなかろうか。それは単に言葉上の「アレ・コレ」ではなく、系統性理解の本質理解に関わる重要な課題だと認識している。

体育の指導では提示された「形」を内容として理解する場合もあるが、体育は身体活動を伴う表現活動であるから、どこを意識してどのような操作をすれば、目で捉えた形を表現できるかを具体的に指摘し、指導できなければ、形を解説・説明しただけでは学習指導というよりは、テレビなどでも行っている解説と同じレベルになっているのではなかろうか。

子どもたちは学習する中身を実体験し、視・聴・味・臭・触の五感覚をはじめ、諸感覚器官（運動感覚・平衡感覚・体性感覚など）を含めた感じ方と統合能力が習得されることによって、その運動に関する身体操作の意味

や方法を認知して理解していくことになる。

体育における分かる・できるは、言語を中心とした教科の理解・認識とは必ずしも同じではなく、感覚器を通した感性的働きや、運動感覚としての筋感覚、体性感覚の一部である反射系などを含めた総合的な身体の統御・統合が必要で、単に言葉による知的理解を超えた内容を含んでいる。

しかも学習対象者である子どもたちは、発達の個人差、運動経験の質・量ともに異なる個性的な子どもたちに指導するのであるから、系統性の形式的理解や一面的な指導では、十分な指導成果が得られないのは当然である。教師は対象となる子どもたちの発達・能力を読み取ると同時に、それらの子どもたち一人ひとりにマッチするように、系統学習の中身を具体化して指導することになる。したがって、指導は絶えず研究を深めざるを得ないので、授業は個性的にならざるを得ないし、系統指導そのものも創造的に適用せざるを得ないのである。

ドル平泳法の全国的普及と会員の拡大

丹下氏が日本教職員組合（以下「日教組」）で活躍されるのは１９６０年からであるが、氏が中央講師（後に講師助言者、そして共同研究者と名称変更）として活躍された次の年頃から教育研究集会（略称「教研」）にドル平が報告されるようになり、東京代表としての第１号が高山博ではなかったろうか。

筆者は63年から助言者の一員に加えてもらい、続いて中村氏と並んで「ドル平」の系統性研究から各教材の系統指導の成果が次々と各県代表から報告されるようになって、同志会の指導・研究が全国的に普及し、会員の増加が、支部結成の礎となり、非常な活性化をもたらした。

特に中村講師の提言による東京・御岳での各県代表参加者による教育研究特別講座は、各県支部の核になるような人材養成と研究の核づくりに多大の成果を挙げることになった。そこに参加された人たちを中心に各県支部が次々と立ち上がることによって、今日の各県支部の基礎づくりになったことは、特筆に価しよう。

日本体育学会に学術的研究として「教育実践研究」を持ち込み、体育指導の根幹を築いたのも同志会であり、大学教師にゆさぶりをかけると同時に、学術研究に耐え得るような実践研究の方法と中身を確立して、全国への影響を拡大していったのである。

これも系統指導による成果がなければ、教育研究集